



フッサールの自我論

| | |
|---------|-------------------------------------------------------------------------------------|
| 著者 | 中村 拓也 |
| 学位名 | 博士(哲学) |
| 学位授与機関 | 同志社大学 |
| 学位授与年月日 | 2011-09-15 |
| 学位授与番号 | 34310甲第509号 |
| URL | http://id.nii.ac.jp/1707/00000970/ |

博士学位論文審査要旨

2011年7月8日

論文題目： フッサールの自我論
学位申請者： 中村 拓也
審査委員： 主査： 文学研究科 教授 工藤 和男
副査： 文学研究科 教授 庭田 茂吉
副査： 文学研究科 教授 林 克樹

要 旨：

本論文は、フッサール現象学の根本的テーマである「自我」の包括的な解釈と研究である。自我論はデカルト以来近代西洋哲学の中心的論点であり、特にカントおよびドイツ観念論以来「自己意識」論へと深められてきたが、フッサールは、現象学的方法によってさらにその時間的構造を問い、世界を構成する機能から自己自身の自己構成にまで深まる自我の深層を微細に探究した。本論文は、フッサール自身の試行錯誤や齟齬に満ちたその難解な著作と研究草稿を繙き、現象学の主旨に基づく分析と解釈の作業を通して、生涯を通じて深化したフッサールの自我論を総合的に再構成することで、自我の働きと成立を解明した論考である。

第一部は、初期の『論理学研究』と『内的時間意識の現象学』をテキストに、その意識流の研究の中に「自我」が登場しなかった理由を問い、かえって、意識流とはまったく異なったあり方をする「純粹自我」の特質を浮かび上がらせる。意識のもつ時間性とは異なる「原意識」の時間構造がその後の自我論の深化へと導くのである。その自己意識論を特徴づけるためにハイデルベルク学派のフッサール批判をも効果的に取り上げている。

第二部では、中期の『イデー』と『イデー』に定位して、純粹自我が人格的自我との関連から取り上げられて解明され、続いて『ベルナウ草稿』と『受動的総合の分析』に基づき、没自我的受動性の次元が分析され、受動性における自我論の限界点でかえって、意識の深層段階でのその「触発」と「対向」という自我論の一層の深まりが論及される。

第三部の後期フッサールの自我論は、まず、現象学自身の方法である「還元」の徹底化として、高弟フィンクの還元論と自我論との対照において解明され、次に、早くから注目されていた草稿(『時間構成についての後期草稿』)でのモナドとして豊穡化された超越論的自我の謎めいた時間性が個体化との関係で究明され、最終的に、意識の最深層に働く「先自我」とさらにその根源で決して現象することのない「原自我」とを自我の構造として統一的に解明して、自我論の到達点として結論づける。

本論文の意義は、受動性を「自我」概念の無効を示すものと解する諸研究に対決して、むしろ受動的な次元をも貫いて意識成立の根源で働く自我を明らかにし、また、その各段階に焦点を当てた限定的な探究に止まっていた諸研究に対比しても、自己意識論ならびに時間論の深化として系統化しつつ、整合的なフッサールの自我論の全貌を明らかにしたところにある。先行研究の詳細な渉猟に基づき、またようやく刊行された研究草稿の錯綜した断片を分析して、果敢にその課題に取り組んだことは評価に値する。今後この全体像に基づく、フッサール自我論のさらに豊かな研究の展開が期待される。

以上のように、本論文は、博士(哲学)(同志社大学)の学位論文としての価値を有するものと判断される。

総合試験結果の要旨

2011年7月8日

論文題目： フッサールの自我論

学位申請者： 中村 拓也

審査委員： 主査： 文学研究科 教授 工藤 和男
副査： 文学研究科 教授 庭田 茂吉
副査： 文学研究科 教授 林 克樹

要 旨：

上記審査委員は、中村拓也氏に対する総合試験を2011年7月2日午後1時から約2時間実施した。

総合試験において学位申請者は、提出された論文の内容に関する口頭試問に対して適切に応答し、論文の意義とその研究水準の高さを明確に示すとともに、主題の背景となる哲学史的な理解についても広範な専門知識を有していることも明らかにした。

また、語学試験（ドイツ語、英語）においても学位申請者が研究上要求される読解能力と運用能力を十分にもつことが確認された。

よって、総合試験の結果は合格であると認める。

博士學位論文要旨

論文題目： フッサールの自我論

氏名： 中村 拓也

要旨：

自我論はフッサール現象学全体を貫く課題である。フッサールの現象学にとって自我は、他の主題と同列に並べることのできる主題ではない。倦むことなく繰り返される執拗な自我への現象学的分析こそが、フッサール現象学の最良の成果をなしているのである。フッサールが生涯にわたって問うことになった自我の問題は、現象学を一体どのような自我論へと辿り着かせたのか、その最終的な到達点とは一体何であったのか、この問いに答えることが本論考の目的である。

論考全体の構成と論証の手続きは以下のとおりである。

第一部では、『論理学研究』と『内的時間意識の現象学』に定位して、初期現象学の自我論を論じる。もっとも、初期現象学では、自我は明確なかたちで主題として論じられることはない。その意味で初期のフッサールは非自我論的現象学として特徴づけることができる。しかし、それは自我の問題が初期には重要でなかったということの意味しない。純粹自我や超越論的自我といった『イデー』以降に本格的に導入されることになる自我が、初期の現象学的研究の主題となることがなかったことには、必然的な根拠がある。つまり、初期の現象学にとって主な研究領域となっている意識流や体験流という内在のなかには、純粹自我が現れることはけっしてない。というのは、純粹自我は意識の内在とはまったく異なるあり方をしているからである。むしろ、そうした内在に現れるものとして捉えることができると考えられるならば、現象学そのものに内的不整合が生じることになる。明確な主題として自我が扱われることこそないけれども、『論理学研究』と『内的時間意識の現象学』には、現象学の自我論の展開にとって欠くことができない重要な概念が呈示されており、後に彫琢されて先鋭化されたかたちで解決を求められる問題も先取りされている。その一つは『論理学研究』の三つの意識概念のなかの第二の意識概念として論じられる自己意識である。これは『内的時間意識の現象学』で原意識として時間論の脈絡のなかでふたたび取り上げられることになる。そして、絶対的意識の特異な時間性へと分析が遂行される。意識流のもつ時間性とはまったく異なる絶対的意識の時間性こそが、『論理学研究』の主題領域に純粹自我が現れることを阻んだのである。そして、ここで発見されたこの特異な時間性への問いが自我論と結びついて一貫して深められていくことになる。そして、フッサールの自己意識論に対するハイデルベルク学派からの批判を取り上げる。現代の自己意識論を代表するハイデルベルク学派の自己意識論との共通性と差異性に光を当てることによって、フッサールの自己意識論の独自性が際立たせられることになる。フッサールはこの自己意識という特異な意識のあり方を問い続け、後期にいたって超越論的自我の究極的な存在様態にとって不可欠の契機へと彫琢することになる。

第二部では、フッサールの中期の自我論を『イデーⅠ』『イデーⅡ』『ベルナウ草稿』『受動的総合についての分析』に定位して論じる。『論理学研究』や『内的時間意識の現象学』によって代表される初期フッサールの自我論が、問題の次元としては、後に自我論として取り上げ直されるものを扱っているにもかかわらず、少なくともはっきりと自我を主題として論じることがないのに対して、中期フッサールの自我論では、現象学的研究の最も重要な主題の一つとして明確に自我の問題が意識されている。

第一章では、『イデーⅠ』『イデーⅡ』で展開される、フッサールの自我論を論じる。『イデーⅠ』では、『論理学研究』では、現象学に持ち込むことを拒否されていた純粹自我の概念

が、重要な主題として取り上げられる。しかし、『イデーⅠ』での純粹自我の記述は、ある程度形式的なものにとどまっており、その具体的内実を明らかにするには至っていない。そこで、フッサールの生前はついに公刊されることになかった『イデーⅡ』での自我論を取り上げる。『イデーⅡ』では、純粹自我に加えて、人格的自我が導入される。この人格的自我は周囲世界と相関関係のなかで生成する力動的な構造をもつ具体的な自我である。そして、純粹自我と人格的自我の関係について論究し、両者を整合的に関係づけることによって統一的解釈を試みる。それを通してさらに、自我の個性という論点が呈示される。

第二章では、『ベルナウ草稿』に定位して時間性との連関でのフッサールの自我論の深まりを見定める。まず『ベルナウ草稿』のかなり特異な成立事情と研究草稿のなかでも特に個別的研究の集積という性格が強く、統一的主題を見出すことの困難さを明らかにする。その上で『ベルナウ草稿』全体を貫く主題を形成している時間意識の構造を考察する際に生じる無限背進の問題を取り上げる。時間意識を分析する際に不可避的に発生してくる無限背進と、それを回避するためのフッサールの解決策にこそ、時間分析と自己意識論の深まり行きという『ベルナウ草稿』のもつ最良の部分を見出すことができる。そして、『イデー』で重要性が指摘されてきたにもかかわらず、実際に行うことが留保されていた時間性を考慮に入れた自我の分析が『ベルナウ草稿』で集中的に行われている。ちょうど『ベルナウ草稿』の執筆の時期に遂行され始めた発生的分析と相俟って、従来の意味での能動的自我が働くことのない没自我的受動性の次元が発見される。しかしながら、慎重に見極められなければならないのは、この没自我的次元の位相である。『ベルナウ草稿』が明らかにするのは、一見するとまったく自我に関わることのない受動的な領域としての没自我的次元は、実際には、抽象によって取り出されたものにすぎないということである。そこにはやはりこれまでとは違うあり方でそうした没自我的次元に関わる自我が仄見えている。そこでたぐり寄せられるべき仄見えていた自我への取り組みが、後期フッサールの自我論を色づけている。

第三章では、『ベルナウ草稿』で、断片的に論じられた没自我的次元を『受動的綜合の分析』に定位して論じる。したがって、第三章の課題は『ベルナウ草稿』で露わにされた没自我的次元の孕む問題を受動性の現象学として具体的に展開することにある。またそれは同時に『イデーⅠ』で展開されるはずであったヒュレー論を実際に遂行することでもある。本来、このヒュレー論はノエシス論と並んで超越論的意識の現象学の主要部分をなすはずのものであったが、『イデーⅠ』では、もっぱらノエシス論が展開され、ヒュレー論は背景に退くことになった。そのヒュレー論が『受動的綜合の分析』でようやく展開されるのである。これによって構成の分析は、その発生段階を遡ることになり、きわめて微視的な分析が遂行されることになる。そこで問題となるのが、触発という現象である。没自我的に生じる触発が生じることではじめて自我は触発してきた当のものへ対向することになる。さらにフッサールはこうした関係性を超える先触発にも言及しているが『受動的綜合の分析』では、触発の段階性が導入されることにより、いかなる意味でも自我と関わることがない触発的無が現象学の枠に入り込むことはなかったのである。そうして、自我のはたらきが受動的段階深くに進んでいくということは、同時に自我の発生段階もまた遡られていくことを意味し、自我生のこれまで隠されていた段階の発見という自我論の深まりをもまた意味するのである。

第三部では、後期フッサールの自我論の一貫した深化による到達点が明らかにされる。ここでは、主に一九三〇年代のフッサールの自我論と時間論の成果を集成した C 草稿に定位して分析を行う。問われることになるのは、自我の最終的位相を顕わにするための方法である還元の徹底化、個性性と時間性、先自我と原自我である。

第一章では、超越論的自我の究極的な存在様態を顕わにするための方法としての還元の徹底化について論じる。その際、還元理論に対して重要な寄与をしたフィンクの還元論が参照される。ただし、フィンクの所論は、その思弁的な要素のゆえに、最終的には、現象学の道を塞いでしま

うことになる。それに対して、フッサールはどのように還元を徹底し、自我の究極的な位相にまで至ることになるのかが示されることになる。そして同時に、還元の究極的意味が明らかにされる。

第二章では、第二部で、『イデー』の自我論を論じた際に触れた自我の個性が、後期フッサールで到達した地点を明らかにする。『イデー』での人格的自我論は、後期では最も具体的な超越論的自我としてのモナドへと彫琢される。伝統的個性論と対照させることによって、このモナドのもつ時間性と連関する個性の独自性を明らかにする。さらに時間と自我の問題の到達地点を確認する。その際、ヘルトが古典的研究のなかで行った卓越した分析を参照する。これによって、超越論的自我の究極的な存在様態がもつ謎めいた時間性の解明を図る。

第三章では、これまで論じてきた成果を踏まえて、注目すべき二つの自我概念を取り上げる。それは、超越論的自我の構造契機としての原自我と先自我である。フッサールの自我論は後期にいたって到達点としてこの原自我と先自我という構造契機を見出す。そして、原ヒュレーの相関者としての先自我と、対象化に抗い、けっして現象することのない中心化のはたらきとしての原自我とが、超越論的自我の構造契機として統一され、フッサールの自我論の到達点として、具体的な超越論的自我どのようなものであるのかが明らかにされる。そして、そのことによって、自我論を巡って生じてきたさまざまな難問が新たな光のもとで、新たな意味づけをされることになる。